



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Sherwood Anderson 再考 : Something と Tandy
Author(s)	一瀬, 真平
Citation	研究論集, 15, 81(左)-91(左)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.l81
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60546
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_006_ichinose.pdf



Sherwood Anderson 再考：Something と Tandy

一 瀬 真 平

要 旨

本稿は Sherwood Anderson の短編集 *Winesburg, Ohio* に描かれる真理のビジョンを考察するものである。プロローグの“The Book of Grotesque”において、真理の理論が提示されているように、この短編集では、「真理」が重要な主題となる。難しい言葉をどんなに並べても正確には言い表すことのできない真理を、Anderson は、簡潔な言葉と文体によって、いかにして表現するのか。本稿は、各短編の真理の描かれ方に共通のパターンがあることを解き明かしていきたい。

これまでの先行研究でも、この作品の主題である真理について論じたものは多くあった。特に注目したいのは、表現主義から Anderson 作品を解釈した David Stouck の論である。Stouck は、Anderson 作品では表現が不可能なものが度々言及されることを指摘している。

本稿は、この言語化が困難なものを考察する鍵として、something の多用と Tandy という不可解な言葉に焦点をあてる。Anderson は、物語における真理に関わる場面を表現する際、「何か (something)」と表したり、意味を持たない言葉を使ったりすることで、具体的な表現を避ける。一方で、各短編において表現が暈された真理には、共通するビジョンが描かれている。それは、老いと若さ、生と死、破壊と創造など、対立する要素が入り交じったイメージである。このシニフィアンにならない真理のビジョンを、Anderson は言語化することはせず、各短編を通してそのイメージを提示することで、そのビジョンを読者の頭の中に浮かび上がらせようとしていた。

I. はじめに

20 世紀初頭の作家である Sherwood Anderson は、アメリカ中西部の田舎町を舞台にした短編集 *Winesburg, Ohio* (1919) で一躍有名になった。彼は、Ernest Hemingway, William Faulkner, John Ernst Steinbeck など多くの作家に影響を与えたことでも知られている。しかし、晩年は、

これらの作家の活躍とは裏腹に彼自身の作品の人気は下降し、彼の名は半ば忘れ去られてしまった。だが、彼の死後、FaulknerがAndersonを“the father of my generation of American writers” (“Interview” 249) とみなしたように、再評価の動きが進んでいき、批評家の間でもアメリカ文学における彼の位置づけが重要視されるようになってきている。

文体を模索していた初期のAndersonは、出世作である *Winesburg, Ohio* において、平易な言葉と文体から成り立つ独特のスタイルを確立した。そして、同時に、表現の不可能性について深く意識するようになったと思われる。この短編集において、Andersonは、真理は言語化が困難であるという問題を前景化させているように見えるからだ。難しい言葉をどんなに並べても、正確には言い表すことのできない真理を、簡潔な言葉と文体によって、いかにして表現するか。Andersonのこの試みを解き明かすために、まずは、*Winesburg, Ohio* のプロローグ“The Book of the Grotesque”に着目することから始めたい。

この序章では、年老いた作家が、プロローグの題名と同じである“The Book of the Grotesque”という本を書いている。語り手がその本を見てみると、以下のような真理の理論が提示されていた。

It was the truths that made the people grotesques. The old man had quite an elaborate theory concerning the matter. It was his notion that the moment one of the people took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque and the truth he embraced became a falsehood. (24)

節約や浪費、富や貧苦、無頓着や奔放についてなど、何百もの真理を老人はその本の中に記したと述べられている。そして、その真理を追求してうまく生きていくことができなくなった人々を老人はグロテスクな人と呼んだ。

このプロローグに関して私が注目したいのは、老人がその本を出版しなかったことである：“It was never published” (23)。老人はこの真理をめぐる人生の間ずっと考え続けたにも関わらず、この真理への洞察は公にされず、語り手以外の人物に開示されることがなかったのだ。彼の内部にある若いもののために、本を出版しなかったとされている¹。その若いものとは、別の個所では、彼の内側にある何か(“something inside him”)と曖昧に表現されており、それが何なのかは明示的に描かれていない。だが一方で、その本が出版されなかった別の理由を、真理の理論の中に見出すことができるように思う。彼の理論で述べられている「抱かれた真理は虚偽になる」に従えば、老人が生涯をかけて考え出した真理は真実味を失っていく定めにある。彼は、自身の真理を保つために、その真理に固執してはならないという自己矛盾を抱えている。老人は、真理を本に記しつつも、本の出版を放棄してその真理に執着しないことで、妥協点を見つけたと言えるかかもしれない。(実際これから考察する通り、老人の内側にある「若い何か」

も矛盾したものの中にあるものなのである。)言葉にした真理を人々に開示しなかったからこそ、本の中の真理は嘘にならなかった。

真理を綴った言葉が虚になるというコンフリクトは、Anderson の作家としての課題を反映しているようにも見える。ここでは、小説というフィクション（虚構）を書くことを問題にしているのではない。重要なのは、シニフィアンにならないものへの Anderson の葛藤である。作家は、小説を通して、究極的な真理を言葉にすることができるのか。安易にそれを表現してしまえばその真理性が欠けてしまう。老人の書いたそれぞれの真理は、曖昧な思考の集まり（“a composite of a great many vague thoughts” [23]）とされている。その序章で描かれた真理を、Anderson は各短編で読者に提示する。このような形のないものは、どのように *Winesburg, Ohio* において言語化されていくのだろうか。

実際、語られたものが真理性を欠いてしまう問題や、言葉を探りあてる困難さは、作品の中で繰り返し言及されている。結婚についての自身の真理を言おうとした Ray Pearson が結局それを言えずに終わり、“Whatever I told him would have been a lie” (209) と言ったのは示唆的である。また、George Willard が Hellen White に対して、何か感心させるような言葉を伝えようとしたときも、“Speeches he had thought out came into his head, but they seemed utterly pointless” (237) と口を噤んでしまう。Enoch Robinson は、自分の絵を友人に語ろうとしたとき、“He was too excited to talk coherently.... He knew what he wanted to say, but he knew also that he could never by any possibility say it” (169) と言語化への課題を抱えている。

Anderson は言葉を紡ぐ難しさを、*Winesburg, Ohio* の登場人物を通して追及し続けた。この点に関して特に注目したいのは、各物語の核心的な（真理に関わるとされる）主題に触れるときの Anderson の二つの特徴である。第一に、“something”を多用していることである。第二に、神々しいものに名前を付けるときに Tandy といったような不可解な言葉を使ったことである。勿論、「何か」としたり、一般的には意味のない言葉を使ったりすることは表現の回避でもあるように見える。しかし一方で、Anderson が「何か」とするものには、共通項があるのも確かである。それは対立物の一致である。若さと老い、男と女、破壊と創造、生と死などの対立する概念の間に Anderson は真理のビジョンを見る。Anderson は、言葉にし難いこの真理をいったん「何か」として言語化を避けつつ、それに付随するイメージを繰り返し提示することで、真理のビジョンを浮かび上がらせようとしているように思えるのだ。

II. Anderson 作品の真理に関する批評

以上の論を展開していく前に、*Winesburg, Ohio* における真理をめぐる批評を見てみたい。Anderson が真理を主題にしたこともあって、言葉で真理を語る意義は様々な観点から論じられてきた。

Lionel Trilling は、Anderson が社会的な問題に立ち向かうとき、過度な抽象化や直観に頼りすぎた表現により実社会の現実性がなくなってしまうと論じている。Trilling は、Anderson が生きた社会とそれを伝えるための彼の言葉との乖離を指摘した上で、プロローグにおける真理の理論をパロディーにして結論部でこう述べている：“*Anderson’s truth may have become a falsehood in his hands by reason of limitations in himself or in the tradition of easy populism he chose as his own*”（強調筆者 33）。Lionel のこの Anderson 批判に対して Epifanio San Juan は、Anderson の人物描写は豊富な想像力に満ちておりリアリティがあると述べることで、この作家を弁護する。また彼は、Faulkner の “fumbling for exactitude, the exact word and phrase within the limited scope of a vocabulary controlled and even repressed by what was in him almost a fetish of simplicity, to milk them both dry, to seek always to penetrate to thought’s uttermost end” (“Appreciation”28) という文を引用し、Anderson の言葉選びの正確さを指摘する。Malcolm Cowley は、Anderson はプロットを作ることは得意ではないとしつつ、彼の作品には、場面ごとに真理の瞬間 (Epiphany) が描かれているとした (6-8)。

近年では David Stouck は、表現主義の観点から Anderson の作品を説明し、彼の作品の目的は、登場人物の強烈な感情に表現を与えることであると論じている (28)。Stouck は、Anderson の作品では、追真性よりも、表現の歪みや繰り返しが重要であると考えた。これらの歪みや繰り返しを使うことで、社会の本質や登場人物の隠れた内面性を暴き出そうと試みていると Stouck は指摘した (39)。Stouck の論の中でも Wing Biddlebaum の手など Anderson が表現できないとしたものが引用されている。本論は、曖昧に表されるものに関して、表現主義の観点から考察するのではなく、それらには短編を通してのパターンがあることを明らかにしてきた。

また、Stouck は、Anderson と絵画との関わりに着眼している (28)。Anderson の兄 Karl Anderson は画家であることもあり、Anderson は絵画に強く関心があったのだ²。絵という観点から私が注目したいのは、*Winesburg, Ohio* では、言葉の限界性の問題が、絵画と関連されて言及されていることである。“Hands”では、Biddlebaum が自身の夢を表現するとき、彼は言葉にはしない。その代わりに、夢を絵にして George に差し出していた。Biddlebaum のビジョンは語ることを通してではなく、視覚に示すことでしか表現できないのだ。Anderson は、他の芸術と比較対照することを通して、言語化不可能の問題について考察をめぐらしていたようである。“Hands”のタイトルともなる Biddlebaum の「手」は詩人にしか語られないとされる。 (“It is a job for a poet” [29]) また、言葉をうまく紡ぐことができない Biddlubaum は、音楽的な要素を言葉に付随させるという特徴を持っている (his voice became soft and musical [31])。“Loneliness”でも、言いたいことを言葉で表現できない Enoch Robinson は、その表現の手段として絵を選んでいいる。しかし彼は最終的には、絵に関しても、自分の感じたことが表されているのが不安になるのである。“He was afraid the things he felt were not getting expressed in

the pictures he painted” (170)。これらは、芸術が表現できる可能性に Anderson が関心を持っていたことを示している。そして、Anderson は、作家である以上、言葉を通してその可能性に追っていくのである。

III. Something と Tandy

Anderson は、言語化が困難な真理を言葉でどのように探りあてるのか。Anderson 作品におけるこの問題を検討する際に鍵としたいものが二つある。それは、Something の多用と Tandy という意味のない言葉である。物語の重要な要素を語るとき、これらの言葉が現れる。それは、言語化の葛藤が表れているようでもある。しかし一方で、これらの曖昧な言葉を、短編を通して考察することで、その言葉の中に一貫したビジョンがあることが明らかになる。

1.

まず、Something について見ていきたい。*Winesburg, Ohio* では、田舎町に住む人々のグロテスクな内面生活に焦点があてられる。この短編集では、この人物達をいかに救出するかが一つの主題となる。ならば、グロテスクになる直前に救われたとされるプロローグの作家にはそのヒントがあるだろう。だが、それは明示的に語られることはない。この人物を救ったものは(また同時に本を出版しなかった理由が)、彼の内側にある若い何か(“Something inside him”)と表現されている。つまり、グロテスクになってしまった人々を救う鍵については、具体的な表現が回避されている。

“Hands” は、主人公 Biddlebaum の手の真実にまつわる話である：“The story of Wing Biddlebaum is a story of hands” (28)。この手が端的に述べられるときも、“There’s something wrong, but I don’t want to know what it is. His hands have something to do with his fear of me and of everyone” (31) と Biddlebaum の手の秘密は something で表されている。物語の中では、Biddlebaum 自体がこの手について語るができないのである。

続く、“Paper Pills”では、主人公 Reefy は、真理についての哲学を持っている。それは、“The Book of the Grotesque”の真理に関する理論に対応する重要性をもっていることがうかがえる。Reefy は、自身の真理に関する思考を紙に綴るとき、次から次へと生まれる思考により真理に迫ろうとするが、それは巨大になりすぎた果てに消え失せてしまう。彼は、結局、その真理が書かれた紙を丸めて捨ててしまう。プロローグの老人の作家が、真理に関する本を出版しなかったことと同様に。そして、Reefy が綴る真理は「何か」で表されている。“[H]e worked ceaselessly, building up *something* that he himself destroyed” (強調筆者 35)。

George Willard とその母 Elizabeth の関係性を語る “Mother” においても、Elizabeth と息子の繋がりは明確に表現されない。“In the boyish figure she yearned to see *something* half forgot-

ten that had once been a part of herself recreated” (強調筆者 40)。一度や二度ならず、物語の根幹部に触れるときに Anderson は something を使いその具体的表現を量すのである。

だが、その「何か」で表現されるものをより詳しく見ると、そこに表わされているものには共通項があることがわかる。それは、対立物の一致である。

“The Book of Grotesque” において老人を救ったものをもう一度見たい。

[S]omething inside him was altogether young. He was like a pregnant woman, only that the thing inside him was not a baby but a youth. No, it wasn't a youth, it was a woman, young, and wearing a coat of mail like a knight. (5)

老人の中に若いものがある。さらに、その老人は妊娠した女のようにだと形容されている。ここでは、男と女、若さと老いという対立する要素がある³。一人の人物の中に相反する要素がひしめきあっている。

語るのは詩人の役目だとされた Wing の手の秘密にも、相反する要素がある。例えば、Wing の手は両義的な評価を受けている。“They became his distinguishing feature, the source of his fame. Also they made more grotesque an already grotesque and elusive individuality” (29)。また、その手は Winesburg の住人からは賛美の的となる：“Winesburg was proud of the hands of Wing Biddlebaum” (29)。しかし過去には Biddlebaum は、Pennsylvania のある街で、その手のために、村人からリンチを受けそうになる。手で少年の頭を触ったことで、同性愛者と間違えられたためである。そのとき村人は、Biddlebaum の手を “Keep your hands to yourself” (33) と非難している。また、物語の最後の場面においては、Biddlebaum は、床に散らばったパンを、素早く手を動かして拾い上げ、それを口に入れている。この惨めな姿が、一方で、勤行中の僧侶を思わせるとされ、神々しく描写されている。

He began to pick up the crumbs, carrying them to his mouth one by one with unbelievable rapidity. In the dense blotch of light beneath the table, the kneeling figure looked like a priest engaged in some service of his church. The nervous expressive fingers, flashing in and out of the light, might well have been mistaken for the fingers of the devotee going swiftly through decade after decade of his rosary. (34)

“Paper Pills” において、Reefy が紙に書き込んだ真理は小さなピラミッドと形容されていた。そのピラミッドは作りだされてはすぐに壊されるものとされている。“Little pyramids of truth he erected and after erecting knocked them down again that he might have the truths to erect other pyramids” (35)。創造することと破壊することの狭間に真理があるのである。その書き留められ

た真理は以下のようにも描写されていた“On the papers were written thoughts, ends of thoughts, beginnings of thoughts” (37)。Reefy の真理は、「終り」と「始まり」の接続点にあるのだ。“Mother”における母と息子で共有された「何か」も、母が失ったものが息子の中に再生（つまり死と生）されるものである。“Between Elizabeth and her one son George there was a deep unexpressed bond of sympathy, based on a girlhood dream that had long ago died” (40)。その共有されたものは、母の中で死んだものであると繰り返し述べられている。そして、George の中に蘇っていくとされているのだ：“Within him there is a secret something that is striving to grow. It is the thing I let be killed in myself” (40)。

それぞれの短編の根幹で述べられる“something”には、対立物の一致という要素がある。これら“something”を描くとき、Anderson の脳裏には、対立物の間、という問題があったにちがいない。Anderson は、究極的な真理に近づくと、この割り切れなさに直面してしまう。そのような彼の抱える真理のビジョンは、概念化され、一言で表されてしまえば、それは真実ではなくなってしまう。エピローグの老人の理論は示唆的だったのである：“[T]he truth he embraced became a falsehood” (23)。よって、Anderson は、真理を明示的に言葉にすることはなかった。本を出版せず、その言葉を人々に開示しなかった老人と類比的である。だが、Anderson は、言葉では真理を描くことはできないとただするのではない。その描けないものに短編集を貫くパターンを作り続けることで、具体的に語らずして、その真理に迫ろうとしていたのだ。

2.

この点をさらに考えていくために、“Tandy”という作品に出てくる Tandy という言葉を考察したい。この短編は、酔っぱらいの青年が、彼にしか見ることのできなかったビジョンに Tandy という謎の名前を付ける物語である。そして、その名前を幼い少女に神々しく命名する、という話である。

この短編の冒頭では、神の姿がその少女の中に現れたと書かれている。その姿を不可知論者の父親は見ることができなかったけれども、青年はその神的要素を見出した。彼はそれを Tandy と名付けた。神という言語化が困難な概念を彼は表現したのであれば、言語化自体が主題となっているこの小説にとって、この名づけた場面は特筆されるべき場面である。だが一方で、彼が生み出した Tandy という言葉自体、一般的には意味をもたない。要するに、シニフィアンにならないものを言葉にする際、不可解な言葉に頼っただけとも考えられる。批評においてもその名の意義はこれまで解き明かされていないままであった⁴。

だが少なくとも、Tandy という言葉には、Anderson 作品における“something”に通じる要素があることは確かである。Tandy という、酔っぱらいの男が創り上げた新しい価値は以下のよう

Out of her defeats has been born a new quality in woman. I have a name for it. I call it Tandy. I made up the name when I was a true dreamer and before my body became vile. It is the quality of being strong to be loved. It is something men need from women and that they do not get... Dare to be strong and courageous. That is the road. Venture anything. Be brave enough to dare to be loved. Be something more than man and woman. Be Tandy. (145)

まず、“something more than man and woman”という男と女を超越したものという要素には、先ほど見た“something”における対立物の一致と共通点がある。

また、Tandy には、“strong” “courageous” “road” “brave” と言った騎士的性質がある。注目したいのは、酔っぱらいの男は暗闇を見つめることで、Tandy のビジョンを思い浮かべたと書かれていることである。“[He] stared into the darkness as though seeing a vision” (144)。また、この短編の舞台設定は、真っ暗な夜であることが繰り返し強調されている。つまり、night と knight が掛けられてもいるのである。Tandy が騎士を彷彿とさせる点において興味深いのは、その騎士が女性であることである。婦人を強さで守る騎士道精神とは逆に、騎士的要素を持つ Tandy は男性が女性から必要とするものなのだ。ここでは、男と女が反転している。さらに、Tandy と名づけた青年は跪いて、椅子の上にいる Tandy と名付けられた少女の手に口づけをする。騎士である者が、跪かれる側にいて、椅子に座っている。つまり、Tandy は騎士であるが王の位置にいるのだ。構図として、王と家来が逆転している。Tandy は、度重なる対立物の反転と共に騎士的なイメージが付与されているのだ。

このような対立物が入り混じる騎士のイメージは、“The Book of Grotesque” の作家を救った “something inside him” を思い起こさせる。

(S)omething inside him was altogether young. He was like a pregnant woman, only that the thing inside him was not a baby but a youth. No, it wasn't a youth, it was a woman, young, and wearing a coat of mail like a knight. (22)

老人の中にある「何か」は騎士のようであった。対立物の一致を接点に、Tandy と老人を救ったものが関連されている。勿論、この特徴は、破壊と創造が結びつく Reefy の真理や両義的評価を受ける Biddlebaum の手とも対応している。つまり、Tandy という言葉は恣意的に生み出されたものかもしれないが、その言葉はほかの短編の重要な要素と結びついていたのである。Anderson は、言い表すことが困難な真理のビジョンを繰り返し提示することで、彼が抱く真理のイメージを読者の頭の中に浮かび上がらせようとしていたのである。

IV. 言葉を模索する作家 George Willard

このように *Winesburg, Ohio* に言語化の問題が伏流していることは、この作品の執筆時、Anderson が作家になって日が浅いことに関係しているのではないだろうか。作家としての自我を確立しようとしているがゆえ、表現の可能性という問題を強く意識していたことが考えられるのだ。作家としてのこの問題は、登場人物である George Willard と共有されているように見える。

George は作品の中で、これから作家になるとされている。“Teacher” では、Kate Swift が George に以下のような言葉が投げかけていた。

If you are to become a writer you'll have to stop fooling with words,” she explained. “It would be better to give up the notion of writing until you are better prepared. Now it's time to be living. I don't want to frighten you, but I would like to make you understand the import of what you think of attempting. You must not become a mere peddler of words. The thing to learn is to know what people are thinking about, not what they say.” (163)

George は、意思疎通を苦手とする人々の代弁者の役割を担っている。この点に関して Cowley は、以下のように述べている。“In those moments of truth that Anderson loves to describe, they try to explain themselves to George, believing that he alone in Winesburg has an instinct for finding the right words and using them honestly” (15)。*Winesburg, Ohio* でグロテスクになった人々は、彼らの心にあるものを George が表現してくれることを願っていると Cowley は考える。勿論、彼に助けを求める人々が抱える問題は、コミュニケーションが取れないという点だけではない。グロテスクな人々が George に語りかけるのは、「真理の瞬間」であることを Cowley が重視しているように、真理の言語化こそ重要なのであろう。John S. Reist も “George's occupation is not accidental. It involves writing, or the communication of the truth” (352-53) と述べている。“Philosopher”では、Parcival が自ら書けなかった真理を、George が本にすることを願っている：“If something happens perhaps you will be able to write the book that I may never get written” (56)。Elizabeth は、彼女と George との間にある繋がりを彼に表現してほしいと思っているのだ：“I will take any blow that may befall if but this my boy be allowed to express something for us both” (40)。

これまで議論してきたように、その真理とは、対立物が入り混じる “something” が関わっている。短編集の中で繰り返し現れる George は、真理の言語化に苦しむ Biddlebaum や Robinson といった人物と出会うことで、言葉にし難い「何か (something)」を表現する問題に何度も出会うことになる。“Tandy”の中でも、George は主だって作品に登場しないものの、青年が少女

を Tandy と命名する様子を目撃している。これらの経験を通すことで、George は真理の言語化の問題に直面する。そして、その問題を抱えて、George は作家の道へと歩いていくのである。彼には、真理のビジョンを模索する作者 Anderson の姿が反映されているのである。

V. まとめ

Anderson は、自らの真理のビジョンを言葉にすることが難しいことを深く感じていた。彼は、真理を語る作家でありつつも、一方で、言語化されたものは真理ではなくなるという洞察を持つという矛盾を抱えていた。Anderson は、そのビジョンの真理性が欠けてしまわないように、それらを具体的に言葉で表すことはしない。だが、短編でそのイメージを繰り返し呈すことで、語らずして、真理のビジョンを読者の脳裏に浮かび上がらせようと試みていた。そしてその言語化の問題は George と共有されている。George は、Winesburg を巣立っていき、作家となる。Anderson もまた、この作品の後、その言語化の問題を抱えて作品を書いていくことになる。それが、続く作品でどのような進歩を帯びるのか。その点は、短編集 *The Triumph of the Egg* の考察の際に述べていきたい。

一方、相反する要素をその真理の中に見るという点は、ものごとを両義的に見る Anderson の視点を表している。この両義的に事象を見つめる視点は、*Winesburg, Ohio* を含めた Anderson 作品を解釈する際の一つの鍵になっていくことであろう。

(いちのせ しんぺい・言語文学専攻)

注

1. 老人は、彼自身も真理を生きたことで、グロテスクな人になりそうになったとされている。その若い何かは、老人がグロテスクになることも留めているのだ。この点は後述したい。
2. Rideout 217-218 を参照。
3. Martin Bidney も、老人の中にある「何か」を両性具有の観点から説明している (261-62) 本稿は、ここでは、男女だけではなく、老人と若さの要素もあることを考慮して、対立物の一致という枠で捉える。そうすることで、その「何か」を他の短編の重要な要素とつなげていきたい。
4. Judy Jo Small は Tandy の批評を振り返り、Tandy の持つ意味の由来が批評において解き明かされていないことを指摘しつつ、少女の苗字 Hard は *Thus Spoke Zarathustra* の中の勧告 “Be Hard” に関わりを持つと考える (122-123)。

参考文献

- Anderson, Sherwood. *Winesburg, Ohio*. Ed. Malcom Cowley. New York: Penguin, 1992. Print.
- Bidney, Martin. “Anderson and the Androgyne: ‘Something more than man or woman’” *Studies in Short Fiction* 25.3 (1988): 261-73. Print.

- Cowley, Malcom. "Introduction." *Winesburg, Ohio* by Sherwood Anderson. New York: Penguin, 1992. 1-15. Print.
- Faulkner, William. "Interview with Jean Stein Vanden Heuvel." Eds. James B. Meriwether and Michael Millgate. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner*. New York: Random, 1968. 237-56. Print.
- . "Sherwood Anderson: An Appreciation." *The Atlantic Monthly*. 191.6 (1953): 27-29. Print.
- Reist, John S. "An Ellipse Becomes A Circle: The Developing Unity of *Winesburg, Ohio*." John H. Ferres. *Winesburg, Ohio*. New York: Penguin, 1996. 348-65. Print.
- Rideout, Walter B. *Sherwood Anderson: A writer in America*. Vol.1. Madison: U of Wisconsin P, 2006. Print.
- San Juan, Epifanio. "Vision and Reality: A Reconsideration of Sherwood Anderson's *Winesburg, Ohio*." *American Literature: A Journal of Literary History, Criticism, and Bibliography* 35.2 (1963): 137-55. Print.
- Small, Judy Jo. *A Reader's Guide to the short Stories of Sherwood Anderson*. New York: G. K. Hall, 1994. Print.
- Souck, David. "Anderson's Expressionsit Art." Ed. John W. Crowley. *New essays on Winesburg, Ohio*. Cambridge: Cambridge UP, 1990. 27-51. Print.
- Trilling, Lionel. *The Liberal Imagination: Essays on Literature and Society*. New York: Viking, 1951. Print.